



エミ・カミヤ

牧野寺 与三郎

画・设计 世也

## Part I

## クレイジー・ガール

0

夜、見通しの効く小高い山の上。ひとりの少女がくるくると、お空を見上げて回っていた。

その足取りはワルツのように軽やかで、顔は幸福そうに微笑んでいる。

時は十月も半ばに差しかかり、秋の色が濃くなりだしていた。その証拠に、お空には、ホラ、まんまるいお月さまが黄金色に輝いていらっしやる。

不意にピタリ、と動きを止めた少女は、狂った三半規管など気にも止めず、改めてまじまじと夜空を見る。

しかし彼女は月を見るでも、月のせいで面影薄い星々を見ているのでもなく、その視線は遥か彼方へと投げかけられているようだった。

つ……と少女が人差し指を突き立てた右手を高く挙げ、星空をなぞるように動かし始めた。

「こぐま」「ケフェウス」「とかげ」「ペガスス」「みずがめ」「やぎ」「けんぴきょう」「インデアン」……様々な星座を通り過ぎ、けれども少女はそのどれをも見ておらず、惚けた顔で遥か南を

指し示す。

「受信、します」

静かにそう言った時、少女の周りの空気が、微かに変化し、にわかに静謐さを帯び始めた。

目を閉じ、何かを感じ取るように頷いた少女は、トロリと溶けそうな瞳を空へ向け、呟くように語りだした。

「ええ、聴こえていますよ。ええ、大丈夫です。お任せください。この星は、必ず私が守ってみせます。そのためには、二人の“協力がなくてはならない”ことも、理解しました。では、明日にでも。総てはレレイキュライの神のお導きのままに……」

言い終え、また目を閉じた少女は、ゆっくりと手を降ろした。それは、何者かとの“対話”を終えた合図のようだった。

軽快な足取りで家路に着く少女の頭上、遥か南の空でダイヤモンドの形をしたナニカが、キラリと輝いた。

1

タイクツデス。

タイクツデス。

オレハツマンナクテ死ニマス。

朝の雑踏。次々と席に着く紺色ブレザーのAくんBくん。おれ、山形圭吾やまがた けいごは机に頬杖ついて、頭のタイプライターで同



じ単語を無制限に打ちまくりながら、変わり映えせぬ日常風景を眺めていた。

Aくんが言う「昨日お笑い見たあ？」

毛ほども笑えんネタ見せ番組のことであろう。

B子が言う「あのドラマ見てる？」

あくびが出るほど予定調和なトレンドイ・ドラマのことである。

皆、くだらんハナシばかりする。

移り変わりの激しい流行り物のハナシ。

くっそー、全くついてけない。

ついてく気もない。

だから、高校生活も半年過ぎて、友達の一人もいないのだ。

いーんだよ。おれは特別なのだから。

しっかし空虚だ。

こうして輝かしいはずの十六歳の日々は無為に浪費されてゆくのかと思うと、少々気も滅入る。

ふと窓の外を見ると、色付き始めた校庭の銀杏の木が、風にそよそよと揺すられていた。

ついだとばかりに、窓ガラスに映った自分の姿を見る。

ぼさぼさの頭にゲジゲジ眉毛。丸っこい鼻に、タレ目。口は不機嫌そうなへの字に曲げられている。

とてもじゃないけど、モテるやつの風貌ではない。当然、彼

女もない。

ガラリとまた生徒の入室を告げる戸の音が鳴る、途端に女子の色めいた声が一斉に沸き、すわ何事とおれを含む男子諸君が一斉に入ってきたヤツを見る。

ああ、ナルホド。

学年一の秀才美少年のお出ましか、無理もない。

サラリとした髪に通った鼻筋、切れ長の目。それを隠すように横長のメガネを掛けた色白の優男は、碓<sup>いかり</sup>貞美<sup>まこと</sup>といった。

学年トップの成績に端正なルックス、おまけに親父が会社の社長とか。

んなわけで女子からはキヤイキヤイ言われているが、本人はさほど興味がないらしく、無口で、無愛想。でもそれがまたいいんだとさ。

何にしても、おれにとつてはいけすかないガリ勉のボンボンだ。

内心毒づいて視線を戻した。するとまた戸の開く音。今度は男子がザワつき出す。

また視線を入ってきた生徒に向ける。

おお！

おれも思わずドキリとした。

腰まである長い黒髪をなびかせて現れたのは月野真琴<sup>つきのまこと</sup>。このクラスきつての美少女で、学年一の変人だ。

極細の筆で描いたような眉毛の下に、くりつとした大きな目。

小ぶりで形のいい鼻。薄い唇。可憐で、抱き締めると折れてしまいそうな華奢な身体。肌は、少々病的なほどに白い。

何度見ても飽きない。やっぱり可愛いなあ。

だがしかし、さつき言ったように、彼女は「変人」である。

いや、おれは「狂人」と言ってもいいような気さえする。

男が群がりそうなほどの美貌の持ち主なのに、入学してから半年で誰も声を掛ける者がいなくなったのもその行動の奇天烈さ故だ。

あれは入学してまだ日も浅い春のこと。

月野は校庭で教師たち数人に羽交い絞めされ、取り押さえられていた。

理由は簡単、彼女が花壇に植わった花々を根こそぎ引っこ抜いてしまったからだ。

美しく整えられた花壇は、今やグチャグチャの工事現場みたくなってしまうている。

しかし、月野は尚も土を掘り返そうとするので教師が押さえ付けていたのである。

「放して！ 放して！」

と、月野は叫ぶ。

「何でこんなことをするんだね?!」

彼女を押さえて顔を真っ赤にしている初老の教師が聞くと、

「言えないの！ この星のために言えないの！ でも、でも大事なモノが埋まっているのよ！ アノ星の人がくれたのよ！」と、髪を振り乱して叫ぶのである。

それが何であるのかは、結局分からず仕舞いだったそうだ。

また、夏のある夕時には、入学当時から月野に想いを寄せていたと思われる同級の男子から、校舎裏に呼び出されて古風な愛の告白を受けたらしいのだ。

すると彼女はイエスともノーとも言わずに、にやにや笑ってこう言った。

「ねえ、知らないでしょうけど、私はとっても特殊な存在なのよ？ 何年か先には英雄として扱われることは間違いないわ。その私と、あなたで、本当に釣り合いがとれるかしら？ 空の彼方からはアノ人たちがいつつても大事な私を見張っているし、もしナニカあったりしたら、あなたきつとミンチよ。グッチャグッチャにされちゃうわよ。それでもいいの？ ねえ？」

そう言って、鈴みたいな声音でコロコロと笑ったそうだ。可哀そうに告白した男子生徒は、よつぼどショックだったんだろう。次の日から不登校になったらしい。

こういう事件が何度かあって、月野は美しさに一目置かれる一方、周りからは完全に孤立してしまっていた。

しかし彼女、人気はあるのだ。カルト的、と言ってもいい。おれも正直、フツの学校に通っていいのかという疑問はあ

るが、彼女が次にどんなことをしでかしてくれるか、楽しみでしようがない。

つまりは皆、フツなことに飽き飽きしてるんだ。この狂人美少女がどこか別の世界のような振る舞いをしてくれるのが、恐い一方で、実は溜まった心の鬱憤を、代わりにぶちまけてくれるみたいで、愉快で堪らないのだ。

キーンコーンカーンとチャイムが鳴った。もうすぐホームルーム、次いで苦痛な授業が始まる。おれはまた頭のタイプライターを打ち始めるだろう。

タイクツデス。

タイクツデス。

オレハツマンナクテ死ニマス。

タイクツデス。

タイクツデス……。

## 2

昼休みを告げるチャイムが鳴った。

これで苦痛な授業から、一時、解放される。クラスメイトはそれぞれ、友達と囲んで、あるいは連れ立って、昼食をとり始める。

おれはというといつも通り、一人で机の上の弁当をつつくの



月野はおれと碓を交互に見て、風に長髪を遊ばせながら、ニコリとほほ笑んだ。

なんじゃこりゃ？

おれは内心のツツコミを外に出さないように必死で堪えた。

おれの両隣には、月野と碓が、ひんやりするコンクリの地面に腰を降ろし、それぞれに昼食をとっている。

学校内有数の美男美女に挟まれて、肩身の狭いさぼさ頭の根暗ヤロウのおれは味のしない弁当に箸をつける。

左右の二人も、無言で食事を続けていた。

碓はコンビニで買ったとおぼしき毒々しいバタークリーム菓子パンと、コーヒー牛乳。

月野は無表記のビニール袋に入ったロールパンと、これまた無表記のペットボトルに入ったオレンジジュースらしき飲み物。

んで、おれは母の手作り弁当……。

ああ！ ミックスベジタブルが無駄に眩しいぜ！

マザコンじゃないが、そう見られるようで少し恥ずかしく、なるべく早く平らげようと箸を進める。

誰も、何も言わない。おれは二人とは面識こそあれど、ロクに喋ったことなどなかった。

碓と月野がどうゆう関係なのかは知らないが、二人に親し気な雰囲気皆無なことだけは確かである。

ただ、黙々と、目の前の食品を摂取していくだけの時間が流れた。

ふと空を見ると、雲ひとつない快晴だった。吸い込まれそうな青い空。しかしおれは、こーゆーいかにもな晴れの日がどうも苦手である。意味もなく憂鬱になってしまうからだ。

十分足らずのランチが終わり、始めに口を開いたのは月野だった。

「さあて……」

スックと立ち上がって、数歩あるき、クルリとターン。こちらに向き直り、キョロリとした目でおれと碓を交互に見る。

「二人をここに呼んだのは、大事なハナシをするための」

こうして、月野真琴のトンでもないお話が始まった。

「実は今、地球に危機が迫っているの。火星からやって来る宇宙人「オレンジ」によって、侵略されようとしているのです。

何故、私がそんな情報を知り得ているかとゆくと、私はゼータ・レイキュライイー・Ⅱの連星から、宇宙電波を受信することが出来るの。五年前、小学校からの帰り道、私は突然強い光に

包まれたの。気がつくとも無機質な部屋で、私は手術台の上にいるわ。何人かの黒い人影がボンヤリと見えた。怖いはずなのに、

何故だか私はとても落ち着いていて、手に何か細工をされていることも分かっていたけど、拒否しなかった。意識が段々遠のいていて、気がつくともまた学校の帰り道だった。随分長い時

間が経過したように思えたけど、実際はものの五分と経っていなかったのよ。不思議でしょう？ でも私は夢をみていたわけではないの。その証拠に、ホラ、右手の人差指！ 見て！ 小さい傷跡があるでしょう？ これを見た瞬間、全身に電流が走ったように感じたわ。私は全てを理解した。私はレイキキュライ座からやってきた円盤に乗せられたの。黒い人影はレイキキュライ星人よ。彼らは私の右手の人差指に、T字型の受信機を埋め込んだの。私といつでも連絡できるように。でもいつでもってゆうのは無理なのよ。ホラ、いまはケータイとかパソコンとかから様々な電波が飛び交っているでしょう？ 余分な電波が混じると通信は不鮮明で聞き取りづらいの。けっこう試行錯誤して、結局夕暮れの裏山の頂上が、一番宇宙電波を受信するのに適していると分かったのよ。ああ、ゴメンね。回りにどこだったかな？ 本題に入るわね。私が何故、二人を屋上に呼び出したかというと、昨夜ね、レイキキュライから緊急の連絡があったの。彼らによるともう近い内に火星からオレンジが地球には飛来するらしいのね。それで、オレンジを迎え撃つのは、ある二人の協力が不可欠だと言われたの。私はちよつとシヨックだったわ。だって私は一人でも充分オレンジを蹴散らすつもりだったから。信用されてないのかなあって。ああ、ゴメンね。しんみりしちゃって。で、その不可欠な二人っていうのが、碓貞美くんと、山形圭吾くんだったというわけなのよ」

分かるでしょう？ とでも言いた気に月野は小首を傾げた。しかしおれにはほんのちびつとも理解できなかった。理不尽とか常軌を逸したとか言う前に、まず日本語として侵入してくることをおれの脳髓が拒んでいるのだ。まっつたく？？？である。

ふと横を見ると、碓が苦しそうな表情で目を閉じている。ああ、おそらくはおれとコイツは同じ感想なのだろうなと何となく思った。

月野が冗談を言っているのではないことは、前例を見ても明らかだし、彼女の目は、国会議員よりも大真面目なのだ。

おれたちが黙っていると、月野は再度口を開いた。

「つまり、二人には協力してもらいたい。オレンジの地球侵略を防ぐために、レイキキュライの神の御名の元に、宇宙戦士になつて戦ってもらいたいよ！」

「もらいたのよ！」などと大仰に言われても困る。おれは妙な汗が背中を伝うのを感じていた。

「えくと、なんつうか、おれも忙しいしですわ……」

ぼさぼさ頭を掻きながら、おれはねんごろに断ろうとおすおす口を開いた。

「具体的にはナニをするんだい？」

余計な質問をしたのは隣のメガネヤロウである。

案の定、食いついた魚に、月野は瞳をキラキラさせている。



「難しいことじゃないわ。毎日、放課後、この学校の裏山の頂上で、遙か南のレレイキュライ座に向かってお祈りをするの。するとその内、あなたたちも特別な波動を感じられるようになるわ。それはレレイキュライからの宇宙電波だから、自然とオレンジと戦うための力も身に着くはずよ！」

なんでやねん。まったく理屈の分からないことを、月野は自信たっぷりに言った。

まるでインチキ宗家の戯言だ。  
 そもそもおれは、UFO、宇宙人の類は一切信じない。

二十一世紀ですよお嬢さん？  
 質問した張本人はというと、隣で顎に手を当てて何やら考えてやがる。いや、考えるフリだなこりや。考えたって分かることじゃない。妄想・妄言なのだから。

おれはこの時、正直言つて猛烈にこの場を去りたかった。いや、正しくは、去らねばならない。という強迫観念が心の中に渦巻いていたのだ。

嫌な感じだった。目の前の憧れの美少女が、今はおぞましい怪物のように見えた。

それが何故かは分からない。ただ、これは理屈ではないのだ、と同時に感じていた。

結局その後、おれは月野と一言も口をきけず、碓も考え込む姿勢を崩さなかった。

ただひたすら、月野がレレイキュライ座とそこに暮らす人々の素晴らしさを語っていた。

何でもレレイキュライには争いが一切なく、そればかりか、争いの基であるお金の概念そのものがない。人々は飢えず、毎日幸せで、ただ一つレレイキュライの神様だけを信じ、お祈りをし、ニコニコと笑って暮らしているのだそうだ。まさに理想郷、ユートピア。

しかし、彼女がいくら熱く語っても、オレの心には一切響かない。

それどころか、半ば乖離した意識の中で、別の生き物みたいに艶めかしく動く月野の唇を、エイリアンみてーだなあとボンヤリ見つめ続けていたのだった。

「それじゃ、放課後、裏山で待ってるわね！」

彼女の元氣いっぱいの声を背に、おれと碓は屋上を後にした。おれは横目で碓をチラと見て、コイツは放課後、裏山に行くのかな？ と、ふと思った。

おれ？ 決まってるじゃん。おれは毛頭、行く気なんかしなかった。

## 4

午後の授業はいつも通りに過ぎたが、オレが頭のタイプを打

つことはなかった。

何故なら先ほどの、屋上で的一件がぐるぐる堂々巡りを繰り返していたからである。

狂人の戯言と割り切ればどうってことないのだろうが、目の前で語られたインパクトというのはやはり絶大だった。

気がつくとも月野、碓を交互にジロジロ見つめる自分がいた。無論、以前とは異なる感情を持つてだ。

放課後、クラスの生徒はあらかた帰ったが、おれはまだ自分の机の前にいた。月野はもつと前に、意味深な笑みをおれと碓に向けて帰ったし、碓も大して気にも止めずに下校した。

彼女がいなくなると月野、碓と屋上に行ったことを知る何人かが口々に「何があった?」「お前らどーゆー関係?」と聞いてきたが「別に……何でも」と齒切れの悪いおれの返答に、直にうんざりして帰って行った。へん、口下手もこーゆー時は役に立つ。

さて、月野とハチ合うのが嫌だったからこうして居座っていたわけだが、そろそろいいだろうと席を立つ。

父から貰った白と赤にゴールドの文字入りのゴワゴワしたスタジアム・ジャンパーを羽織り、教科書や貴重品の入ったスポーツバッグを肩に掛ける。

教室を出、下駄箱に行き、校門を出、停めてあった自転車に跨り、当然、裏山へは向かわず、家を目指す。

月野からの誘いは嬉しいと言えば嬉しい。しかしそれはマトモな遊びや、シヨッピングなどへの誘いだつた時に限つてのことだ。ハッキリ言つて、おれは以前より一層、月野を異常視していた。ま、それも仕方ないことだ。あんなことを真顔で言われちゃあ。

しかし、約束を反故にする罪悪感がなかったわけではない。でも、行くのは嫌だ。おれの危機察知能力がそう言っている。

しかし、気分が悪いのも事実……。

その気持ちのブレが、おれのある場所へと向かわせた。

それは帰り道の途中にある、「円谷書店」という潰れかけた本屋だった。

おれ行きつけの本屋である。店主の円谷老人は大抵いびきをかいて寝ているし、店内の照明は節約のため半分は消えているので常に薄暗く、週刊誌は二、三週前の売れ残りが余裕で置いてある体たらくぶり。書店として失格であることは間違いないが、ある一つのジャンルに限り、その全ては帳消しになる。

ふふふ、こんな妙なモヤモヤ抱えちまった日には、本能的な欲望を満たすに限るのさ。

もうお気づきだろうか? おれがこんなボロイ本屋に行きつけているのには、一重に、他の本に比べ、異常なほどに品ぞろえのいいエロ本コーナーの存在がある。

おまけに客足はまばら、近年厳しくなりつつあるコノ手の本

の取り締まりも当然の如くゆるゆるであるから文句はない。

なに？ 今はネットの時代だって？ そりゃパソコンがある家の話でしょ？ おれには関係ないね。

父が仕事用にノート型を持ってはいるが、勝手に触れないんだよなあ。

マンガ、文庫、芸能誌、ファッション誌、スポーツ誌、あらゆるコーナーを足早に通り過ぎ、奥の奥、次の角を曲がれば男のバラダイスが待っている！

鼻息荒く角を曲がったところで、ハタと足が止まった。

何故……だ？

いつもならくたびれたリーマンかニート、ホームレスのおっさんがいるくらいなのに……。

なんでまた、よりによって……。

一瞬そのまま帰ろうかと思ったが、先を越されたみたいで癪なので、何食わぬ顔でそいつの傍まで行って、読んでいるのと同じエロ本を手に取り、同じ頁を開く。

そこには人気AV女優、澤井ちひろの特集記事があった。

……まさかの同じ趣味である。

澤井ちひろはおれのお気に入りの女優だった。

可憐で整ったルックス、長い黒髪、強い目力、スレンダーな身体つきも、どこことなく月野を連想させる。

彼女には何度、お世話になったことか……。

さて、そいつはおれのことになど気付かずに、無心で記事を、正しくはアラレもないヌードを凝視している。おれはそいつに、声を掛ける決心をした。

「……よお」

思ったよりも低い声が出て、自分で驚いた。しかし、そいつはおれの比ではなく、メガネがずれ落ちんばかりにビクリとなっていた。

ロボットみたいな、ぎこちない動きでこちらを見る。

その目は小動物のそれで、不安に支配されていた。

「……やあ」

そいつ、制服の上にカーキ色のブルゾン、そして肩からは黒いナップザックという洒落た出で立ちの碓貞美は、やっこのこととでそう呟くと、本を手荒く棚に返して、足早に立ち去ろうとした。

「待てよ！」

おれは呼び止めた。何故かは自分でもよく分からない。

「い、碓くんも、好きなのか？」

「な、なにがだい？」

「澤井ちひろ……」

「……ああ」

「おれもだ」

おれと碓は何となく見つめ合い、そしてどちらともなく、照

れたように笑った。

おれは碓が笑ったのをこの時、初めて見た。

## 5

もうすっかり日の暮れかかった夕映えの町を、おれと碓は自転車を押しつつ、並んで歩いてた。

円谷書店を出てから、おれたちは自然に帰り道を共にしていたのである。

偶然にも、帰る方向は一緒だった。

「しかし、驚いたな。碓くんがあの本屋を知ってるなんて」

「……碓でいいよ」

「そ、そうかい？　じゃ、おれも山形でいいよ」

「……そうする」

「ははは……」

こんなブツ切れの会話でも、内気な二人の少年にすれば大したコミュニケーションだった。

だっておれたちは今の今まで、口を利いたことすらなかったのだから。

会話の中で、おれと碓が同じ方角に住んでいること、どちらも帰宅部で「円谷書店」を穴場として利用していることなど、意外な共通点がいくつも見つかった。

これまでこうして逢うことがなかったのが不思議なくらいだ。おれは、今まで碓貞美を別次元の人間だと思っていた。

女にモテ、勉強ができ、家も裕福。

モチロン嫉妬心もあったし、どこかでツマンねえヤツ、と侮蔑もしていた。

それが、同じエロ本目当てにこそこそと潰れかけた本屋へ通っている。

それは想像するだけで滑稽で、何とも愉快な気持ちになった。見下してるわけじゃない。同じ目線になっているのが、富豪

もホームレスも人間なんだ！　ってゆう人類平等の証明みたいな感じがして、大袈裟だけど、理屈抜きに嬉しかったのだ。

「今度、DVD貸すよ。澤井ちひろの」

「……………」

「いらない？」

「……いる」

「だろう？」

おれは声を立て、碓は声を殺し、含んで笑う。

「でもさ、碓みたいに家が金持ちなら、何もあんな本屋行かなくて」

「そうでもないよ。家の話は……よそう」

家の話題がチラつと出ただけで、碓は露骨に嫌な顔をした。おれはドキつとして慌てて話題を変える。

「ああ、でもさ、ほんと意外だなあ」

「もうクドイよ。僕だってああゆう本、読むよ」

「違うさ」

不機嫌そうにメガネをいじる碓に、おれは立ち止まって向き直った。

つられて立ち止まった碓は、怪訝そうにおれを見ている。

「碓は、月野のどこに行くんだと思ってた」

実のところ、これが言いたくて並んで歩いていたと言つてもいい。

碓は一瞬、整った眉をピクリとさせたが、とりわけ動揺するでもなく、静かにこう返した。

「そういう君は、何故行かなかった？」

おれは一瞬、言葉に詰まる。

「……だつてさ、行きづらいだろ？ あんなこと真顔で言われちゃあさ」

「確かに……、アブナイ人だね」

「うん、そう思われても、文句言えないよ。レイキキュライやらオレンジやら、そんなオカルト信じられるかって」

「君は……、山形はUFOとかって信じる？」

思わぬ問いに、おれは目が点になる。

「……信じない」

「何故？」

「何故って、ヒカガクテキだから」

「どう非科学的なんだい？」

「それは……」

「何故？ 答えられないだろ？」

矢継ぎ早に飛ぶ碓の問い掛けに、おれは少しイラつとした。

「知らないよ！ そんなの。ただ信じられないだけさ！ 碓はいるって思うんだな？ なら、『証拠』を見せてくれよ」

「ないよ」

「は？」

「証拠はない。でもそれは御互いさまさ。肯定するにも否定するにも、確たる証拠はないんだよ」

「はあ、まあ……」

妙な屁理屈で返された気もするが、おれは言いごもるほかなかった。

「ま、テレビなんかで特集するやつは大概エセだけだね。知ってるかい？ 「C U F O S」ってゆうUFO研究団体が調べた

UFO目撃の突き詰めた正体っていうのは恒星・惑星の見間違いが圧倒的に多いんだよ。ほかにも広告用ヘリや飛行機、隕石、人工衛星、そういうや空中を飛んでいたゴミ、なんてのもあった

な。目撃者は一様に興奮して、「不規則に動いていた」とか「我々

を追って来ていた」とか言ってるんだけど、飛行機ならまだしも、恒星・惑星の場合はね、動いてるのは目撃者の方だった

てわけなんだ。笑つちやうだろ？ つまりは単なる思い込みによる錯覚。人間って面白いよね」

そう言って碇はクスクスと笑った。

無口から一転、異常なほど饒舌になった碇を見て、呆気にとられたおれだったが、すぐに、ああ、おれはコイツのスイッチを押しちゃったんだなあど納得した。

UFOマニアか、いい趣味してるぜ。

「じゃあ決まりじゃないか。UFOなんていない。宇宙人なんていない」

よせばいいのに咄嗟に返してしまった。

「いやいや、でも断言は出来ないよ。米空軍に実在した『プロジェクト・ブルーブック』ってゆうUFO研究機関によるとUFOの誤認率は九十五%。こーやって言うの大した確立だけど、残りの五%は正体がハッキリしていないってことになる」

「じゃあ君は残りの五%に賭けてるってわけか」

呆れた。という調子でおれは言った。

「まだある。ブルーブックの科学顧問をしていたUFO界のガリレオって呼ばれてるハイネック博士の主張で、ブルーブックの調査におけるUFOの正体の判明率は、実はそんなに高くないという指摘がなされているんだ。理由は簡単。ブルーブックではデータが不足している事例はデータ不足の項目に入れられ、『解決済み』として処理されてしまうからなのさ。そうすると

先の九十五%の誤認率の方も怪しくなる。何でもデータ不足の事例は全体の二十%にも上るとハイネック博士は証言しているからね」

正直言つて、もうどうでも良かった。

しかし、碇は何か言い返して欲しそうにおれを見てる。

どうしようか迷っていると、碇は自分で勝手に喋り出した。

「僕はね、懐疑主義者なんだよ。いるのかわからないのかは五分五分つってとこ。UFOにしたって宇宙人の乗り物とは限らないよ。U・F・Oはあくまで未確認飛行物体の略称で、宇宙人が乗っているのは「エイリアン・クラフト」っていう別の呼び名があるんだ。そうだ。山形、君はサンタクロースは信じる？」

「はあ？」

コイツはおれをバカにしてるんだろうか。

自然と言葉に怒気がこもる。

「信じてるわけないだろう」

「でも子供の頃は信じてただろう？」

「そりゃあ、まあ」

「今でも別にサンタは嫌いじゃないよね？」

「何が言いたいんだ？」

「つまりね、ぼくがUFOや宇宙人に対して思っているのは、君がサンタに対して思っている感情の強いものだど理解してもらったらいよいよ。いない可能性の方が高いけど、ちよつとも

いるって思ってた方が楽しいじゃない。……ロマンがあるってやつかな」

別に理解したくもない。

なんとなく分からんでもないが、いくらなんでもUFOや宇宙人とサンタクロースでは土俵が違いすぎるではないか。

それにロマンなんて古臭いセリフがよく言えたもんだ。

おれはなんだか無性にムカムカしてきた。碓が夢中に話していることを理解出来ないのが、悔しいわけでもないだろうに。

せり上がってくる不快感を紛らわせるように、そして、コイツの独壇場を終わらせるために、おれは口を開いた。

「じゃあ碓、君から見えて月野真琴はどうなんだ？」

そもそもは月野の話題から横道にそれたのである。

「どうかって？」

「モチロン、信じるに値するかってことだよ」

軌道修正された話題に、碓は少し考え込む仕草を見せた。

「うん、無理だな。信じられない。妄想の類だと思うよ。ただ

……」

「ただ？」

「レイキキュライゼータⅠ・Ⅱの連星は実在する。もつとも、

日本からじゃ那覇に行ったって半分しか見えないけどね。それにオレンジって名前にも聞き覚えがあるんだ。彼女、月野さんは、UFOに関するある程度の知識はあるように思う。アブダ

クションやインプラントにしても、似た話を読んだことがあるし、多分、彼女はどこかで仕入れた情報をゴチャマゼに話しているんじゃないかな。あの顔はイタズラで狂言をしているようには思えないしね」

なにやらよく分からない単語が出てきたが、スルーすることにする。

だって突っ込んだらまた長々とUFO蘊蓄を聴かされるハメになるからだ。

しかし、確かにあの顔はマジだった。おれは月野の真剣な様子を思い出して、背筋がぞくりとするのを感じた。

「……今でも、待っているんだろうね」

碓がボンリと呟いたのを、おれは聞き逃さなかった。

陽は、いつの間にかとつぷりと沈んでいた。

明滅する外灯の淡い光に照らされて、おれたちはポツリと立っている。

待っているだろうか？

ほんとに？

あの嘘みたいな話でおれたちが釣られるとマジで思っているなら、あの娘はフツーじゃない。

いや、そうだよ。

「フツーじゃない」

おれたちはよく知っているじゃないか。

月野は待つてる。間違いない待つている。

あの裏山の頂上で。

ひとり、寂しく……。

「なあ」

どちらが先に発した言葉だろう。

そんなことはどーでも良かった。

「行ってみるか、裏山に」

おれと碓は踵を返して、自転車に跨り、もと来た道を全速力で戻った。

月野の待つ裏山を目指して……。

## 6

はあ、はあ、はあ。

息も絶え絶え、半ば後悔しながらも、おれと碓は山道を進んでいた。

裏山はその呼び名の通り、おれたちの通う学校の真後ろに、こもり聳えている。

本当の名は「岡見山」といい、標高百m未満の低い山だ。

クヌギなどの広葉樹が多く生えた山道は比較的なだらかで、歩きやすい。

しかし普段からインドア派を決め込んでいるおれらみたいな

モヤシには、この道だつて充分ハードだ。おまけに整備が行き届いていないせいも、台風後の倒木なんかそのまま放置しており、無駄な障害物を作っていた。

昔は、山頂から田畑が広く見渡せ、岡のように平らで広いスペースがあることから、「岡見山」と名付けられたそうだ。

しかし、ここ数年の新興住宅の増加によって田畑は消え失せ、当時の景観の良さは失われた。

今ではこの近辺でも物好きしか訪れない、穴場的な場所になっている。

ザクツ、ザクツと土の地面を踏み締め、息を弾ませながら、おれたちは山頂を目指す。

「もう着くかなあ、碓い？」

「し、知るもんか……」

「碓、メガネすごいズレてるぞ」

「……知るもんか」

幸い、月の光が強く、碓がペンライトを持参していたこともあり、道に迷うという最悪の事態は回避されていた。

何度も木の幹や石ころに躓き、ガサリと動く茂みにビクつきながら進む。どれくらい経っただろうか？ ようやく常に前方を覆っていた広葉樹の群れが、五十mほど前でサアと左右に開いているのを確認した。

「着いた！」



同時に叫び、後は二人でラストスパート。力を振り絞って駆ける。

笑顔でこう言った。  
「わかっていましたよ。必ず来ると。全てはレイキュライの神の御心のままに」

息が弾む、脳内麻薬でも出ているのか気持ちがいい。  
自然のアーチを抜けると目の前が開け、おれたちは幻想的な光景を目撃する。

## 7

その名の通り岡みたいな頂上の平地で、月の光に照らされて、一人の少女が踊っていた。

「さあ、まずはレイキュライ座に自己紹介をしましょう！」

ワルツみたいに軽やかに、時々まクルリとターンして、空に右手、人差し指を立てたまま。

月野は元氣いっぱいと言った。  
この山を登って、今まであんなに踊っていたのに、息一つ切らしていない。

上は乳白色のダウン・ジャケット。膝まである紺色のスカートが動くたびにヒラヒラ揺れた。月光に生白い足がなおさら白く映え、目をつぶり、長髪をキラキラ舞わせながら、月野真琴は踊っていた。

やっぱフツーじゃないな。

不意にピタリと動きを止めると、目を開け、思わず見惚れているおれたちギャラリーをじいっと見つめる。

おれはラストスパートが効いて、月野の言葉がうまく理解できない。

自己紹介？

「や、やあ、来たよ」

誰に？  
「ホラ、レイキュライの皆は出迎えてくれますよ！」

おれは努めて明るく言った。

月野が南の空を指差してキヤツキヤツとはしゃぐ。

「ごめんね。遅れて……」

その指の示す方を見ると、いくつもの星が月明かりに阻まれながら懸命な輝きを放つ中、一際強い光を放つ四つの星が、ち

碓も半笑いの表情だ。

ように点線で結ぶとランプのダイヤを形作る位置で、ギラギ

ら。ズレていたメガネは、いつの間にか真っ直ぐに整えられている。

ラと輝いていた。

どこことなく居心地の悪そうなおれたちに、月野はとびきりの

「なんだ、あれ……？」

「そんなバカな！」

おれの言葉尻に食い込む形で、息の上がった碓の掠れがちな声が響いた。

「なんだ、あの星は。レレイキュライ座なわけが無い！ 日本からは全景を見るのは不可能なはずだ！」

かなり興奮した様子でまくし立てる碓に、月野は温和そうな笑顔で、言い聞かせるように言った。

「普通の人には見えません。でも、私と、山形くん、碓くんは選ばれた存在。だからあんなに輝いて見えるのよ。ホラ、二人も挨拶を。それが礼儀でしょう？」

星に挨拶。

明らかにイカれているが碓の動揺の仕方を見ると、従わなければならぬ気がしてきた。

とりあえず、そんなに拒む理由もないのだ。

おれは何となく手を合わせて「こんばんは、山形圭吾です」と、ギクシヤクしながら言った。

一方の碓も、何とか気を静めて「……碓貞美です」とだけ言った。

「よろしい！」

月野は満足した様子で、大きく頷くと、目を閉じ、右の人差し指を再び空へと突き立てた。

「これより、新たな同志二名とお祈りをします！」

それだけ言うとシン……と黙った。

「何を祈るんだ？」

これまた何となく声を潜めて尋ねたおれに、月野は「地球とレレイキュライ、そして銀河系すべての平和を祈るの」と返した。

随分、大雑把なんだなと思いつつも、しつかり従って祈ってしまっている自分の妙な生真面目さが、何だか忌々しかった。

それから体感時間にして十分ぐらいそうしていた。

真冬ではないとはいえ、夜の山の空気はやけに冷たく感じた。

登り切った頃は心地よかった鼻の奥にツンと来る夜気も、ジンジン痺れるような痛みが変わってきている。

薄眼を開けて隣を見ると、碓も寒そうに小刻みに身体を揺すっていた。

平気そうなのは月野だけである。

「おしまいっ」

月野が唐突に言って、お祈りは終わった。

ふと空を見るとさつきまで燃えるように光っていた四つの星は、もうどこにも見当たらなかった。

代わりに、月の明るさだけがやたらと眩く感じられた。

不意に右の手に熱を感じ、見ると月野がおれを手を握っていた。

胸にグツとくる少しはにかんだ笑顔を浮かべて。もう片方の

手は碓と繋がっている。

碓の頬が火照って見えるのは、山歩きの疲れだけとは思えなかった。

「さあ、山形さんと碓くんも」

どうやら輪になるように手を繋げということらしい。

その通りにすると月野は満足そうに頷いた。

「今日は、本当にありがとう。これから大変なことがたくさん起きると思うけど、私たち三人なら、きっとやり遂げれると信じています。さあ、踊りましょう!」

ええ?

踊るのかよ。

なんて思う間もなく、クルクルと回っておれたちは踊った。

ウフフフ

アハハハ

月野の笑い声だけがやたらと響く。

本当に楽しそうだ。

時折、長い髪がおれと碓の顔に当たって、こそばゆかった。

シャンプーみたいな匂いも香ってくる。

ふと視線を下げると、膝まであるスカートから伸びる二本の足が、艶めかしさを伴って躍動している。

おれはスポーツバッグを肩から下げたままだったものだから、こつこつ脇腹に当たって鬱陶しかった。

おれたちはそのまま回り続けた。

どちらともなく吹き出して、気付くと三人とも声をあげて笑っていた。

回りながら空を見ると、月を中心として、キラめく星々が、メリーゴーランドのようにキュルキュル回っていた。

キレイだな。

そう思いながら、おれたちはただひたすら、回り続けていたんだ。

8

「ただいま」

恐る恐る玄関のドアを開ける。

山頂で最後に時間を確認した時、腕時計は午後六時を指したまま止まっていた。

山に入る前が六時前だったので、どうやら途中で止まってしまっていたらしい。

碓の腕時計や携帯も見たが、どれも同じ時間のまま止まっていた。

おれたちは正確な時間の分からないまま急いで山を降り、月野とはその場で、碓とは途中まで帰路を共にし、家路に着いた。

慌てているおれたちを尻目に、月野はしきりに「大丈夫、大

丈夫」と言っていた。

大丈夫なもんか！

ウチには特に決まった門限などないが、いつもは遅くても七時には帰っている。

電車に乗る必要のない距離なので、乗り遅れたなんてゆう言い訳も出来ない。

懸命に自転車漕ぎ、今に至る。

もしかしたら、いや、しなくても八時は回ってるだろう。

絶対に怒られる。

山歩きに帰りの猛ダッシュが祟って、言い訳を思いつくほどの頭も回らない。

どうにでもなれだ。

一度目の「ただいま」に返事はなかった。

「ただいま」

もう一度。

「おかえり」

とキッチンの方から返事がした。

ちなみにおれの家は二階建てで三人暮らし、父はノーマルなサラリーマン、母は主婦というステレオ・タイプな家族だ。

そろそろと声のした方へ行くと、母の三枝子が夕食の準備をしていた。

夕食は七時過ぎと決まっている。

おれが顔を出すと、母はクルリとこちらを向いて「おかえり」と笑顔で繰り返した。

怒っている素振りも、遅くなった理由を問いただす気もないようだ。

しかも今日に限って夕食が遅れているらしい。

「父さんも遅くなるの？」

父の和雄は残業さえなければ七時前には帰ってくる。

玄関に靴もなかったし、残業で遅くなっていることも考えられた。

「は？」

母は頓狂な声を出した。

こっちに向き直り、包丁を右手にまじまじとおれの顔を見る。

「圭吾、あんた何言ってるの？」

何って。

今の、時間は……。

「あっ！」

キッチンと繋がったリビングの、壁に掛っている時計を見て、

おれは思わず声を上げた。

六時三〇分。

裏山に入る前に確認してから、約三〇分しか経っていない。

そんなはずはない！

少なくとも裏山に三時間近くはいたはずである。

何故だ？

おれの時計が狂っていたのだろうか。

しかし碓のと同じだった。

これじゃあまるで……。

そう、まるで裏山に入ってから出るまでの時間が、丸ごと消え去っている」としか思えない。

背筋を、何か冷たいものがツ——と流れた。

「あつ！ 圭吾！」

母がいきなり大声を出し、おれは心底ビクついた。

「な、なんだよ」

「あなたドロドロじゃないの！ どこで遊んできたのよ！」

見ると、今まで気付かなかったのが嘘みたいに、山から持ってきた土や草葉が、制服のズボンやジャンパーのいたる所に付いていた。

暗闇の中、未整備の山道を歩き回ったのだから無理はない。

「まったくもう。制服の代え、あるわよね？」

「あ、うん」

「さっさと先にお風呂、入っちゃいなさい」

別に服を汚した理由を聞き出そうとするわけでもなく、それだけ言うと母はまた夕食の準備に戻った。過保護なようで、どこかすつぽり抜けているというか、放任主義なところがある。ウチの特徴かもしれない。

脱衣場でジャンパーを除く汚れた服を洗濯カゴに入れながら、

湯気が立ち込める風呂場で、右肩から順に身体を洗いながら、

少々沸かし過ぎた熱めの湯に肩まで浸かりながら、おれの頭にある

タイプライターは、絶えずナゼダ？ ナゼダ？ と疑問符

を打ち続けていた。

ナゼ、帰り道に碓とバッタリ会ったのだろう。

ナゼ、UFOの話なんかしたのだろう。

ナゼ、唐突に月野の待つ裏山に行く気になったのだろう。

ナゼ、あの星はあんなにも輝いていたのだろう。

ナゼ、月野と回りながら、あんなに笑えたのだろう。

ナゼ、時間が消えてしまったのだろう。

全てが偶然のようであり、また必然のようにも思えた。

堂々巡りの思考の果てにはやはり、月野というおかしな少女の存在が、不気味な光を放つあの星と同様の奇怪さを醸している。

不意に碓の意見を聞き取なくなった。

電話しようかとも思ったが、よく考えたら番号を知らない。

生徒用の連絡帳を調べる元気はおれになく、夕食の時点で眠くなっていった。

「どうした圭吾？ 元気がないな」

父の和雄が心配そうな声で聞く。

「あ、ううん、平気だよ」

「お父さん、この子だったらねえ、どこかでドロドロになるまで遊んできたんですよ。だから疲れているんでしょう」

母がおどけたように言うのと、父は顔を険しくした。

「……圭吾、お前、もしかして、イジメられたりしてないか？」

うつろだったおれは意識して笑顔を作ると「ない、ないよ」と言っって手をブンブン振った。

「やだわあ、お父さんたら心配性なんだからあ」

母はアハハと明るく笑う。

確かに父は必要以上に物事をネガティブに捉えるクセが付いていた。だから、四〇手前で毛髪が危うくなっているのだ。もつとも、あつけらかんとした性格の母とは、相性が良いように思えたが。

おれは父に似たらしい。しかし、頭まで似るのはゴメンだな。

ベッドに入ってから、オレの思考はぐるぐる回っていた。

しかし、疲れた肉体と精神は睡眠を求める。

やがて思考は麻痺していき、おれは深い眠りに着いた。

最後に瞼の裏に浮かんだのは、月明りの中、己が信じた神に懸命な祈りを捧げる、月野真琴の姿だった。

## Part II

### ファースト・コンタクティ

#### 1

目が覚めると、見知らぬ場所にいた。

そこは一面、見渡す限り野花が咲き乱れ、空は嫌味なほど青く澄み渡っていた。

不思議と、嫌いじゃない。

それどころか、とても心地が良かった。

「山形くん」

声を掛けられて振り向くと、そこには月野がいた。

彼女は学校の制服のまま、ニコニコと笑っている。

「月野。ここは一体？」

「ここは、レティキュライよ。覚えていないでしょうけど、昨日あのお祈りの最中に円盤が来てね、私たちをここまで連れて来てくれたの」

「そうなんだ……碓は？」

どこを見ても花と空と月野しかない。碓がない。

「彼も来てるわ。ここにはいないけど。それより、ねえ」

後半、月野の声が急に艶っぽくなった。

突然、ブレザーのボタンを外し始める。

「あ、つ、月野」

動揺している間に彼女は下着だけの姿になった。

滑らかな肩。浮き出た鎖骨。胸元には、それなりに豊かな谷間が作られている。

その下には女性的なくびれ。小さなヘソ。肉感的な太股から成る、二本の足。

「ここにはね、争いの種になるような物は、何もないの。その代わりにね、愛があるの」

「あ、愛？」

「そう、無償の愛。この星では恋人も夫婦も愛人もないの。そういう関係自体が無意味なのよ。いらぬ嫉妬を生むから。その代わり、誰でも『愛し合う』権利があるの。どこで、誰とでも、愛を育めるのよ」

そう言いながら、月野は一步一步、おれとの間合いを詰める。手を伸ばせば、もう身体に触れられる距離まで来た。

「ねえ、愛し合いますよ。ここではそれが自然なのよ」

おれは無言で月野の両肩に手を置いた。

華奢で、軟らかく、強く握れば折れそうだった。

月野は口づけを待つようにそっと目を閉じた。

ほのかに紅潮した頬と艶めかしい唇が、否応なしにおれを刺激した。

「月野！」

「山形くん」

おれは本能に任せて月野の肢体にむしゃぶりついた。

野花の群れが、おれたちの恥じらいを知ってか知らずか、そっと包むように生い茂っていた。

目が覚めた。

ベッドの上。

二階にある、おれの部屋。

なんだあれは。

こんなにバカバカしい淫夢を見たのは久々だった。

下半身を感じる違和感はずっと気のせいではないだろう。

おれは「ちっ」と舌打ちすると、時計を確認。両親もまだ夢の中の明けがた前だと知ると、筋肉痛に軋む身体を引きずって、そろそろとトイレへと向かった。

## 2

昼休み、おれと碇、月野は、それが当然であるかのように、屋上でランチと洒落こんでいた。

月野は終始、上機嫌で、昨日受けたレイキュライからの宇宙電波の内容を、立ち上がって身振り手振りも交え、とりとめ

もなく話している。

「レディキュライの人たちも本当に喜んでいたら。二人は本当に戦士の素質があるそうよ！ 私も鼻が高いわ！ オレンジの地球侵攻にはまだ少し時間が掛かるみたい。それまでに二人ともしつかりお祈りして、宇宙電波を一杯に浴びないとね！」

とかなんとか。

おれと碓はそれを聴くふりをしながら、昨日起きた不可解な出来事について意見を述べ合っていた。

「やっぱりか」

「じゃあ山形、君も？」

「時間が、止まっていた」

「ミツシ時ン間グ漏タイム現象か……」

「なに？」

「UFO関連の話ではよくあるんだよ。一番有名なのは六十年にアメリカのニューハンプシャー州で起きた「ヒル夫妻誘拐事件」かな。

深夜十一時ごろ、仕事を終えたヒル夫妻が車で帰宅途中、UFOに遭遇した。

必死で逃げた夫妻を後ろから「ビー——」という怪音が襲い、二人は意識を失う。

再び同じ音をして二人が気が付くと、UFOを目撃した地点から五十六kmも南に離れた町にいたんだよ。車は運転したまま

でね。

後で調べて分かったことは、二人が帰宅までに掛かった時間が、いつもより二時間余分に掛かってたこと。

そして時計は二人とも同じ時刻を指したまま止まっていたらしい」

「つまりその二時間が……」

「ミツシンググタイム。失われた時間ってわけさ。ちなみにレディキュライの元ネタもこの話。夫妻はUFOに攫われて身体をいじられたと後に証言しているんだけど、その際、夫人が宇宙人に見せられた天体図を専門家が割り出した結果、レディキュライ座と一致したらしい」

「その話は信用できるのか？」

「どうだろうね。夫人の証言は一貫性に欠けるらしいし、これに似た話はほとんどインチキか精神疾患が見せた妄想だつて言うよ」

「なんの話してるの？」

気付くと月野が、話し込んでいるおれたちを覗き込んで、不審そうな顔をしていた。

「いや、なんでもない」

おれたちはほぼ同時にそういうと、それ以上、会話は続かなかった。



放課後、おれと碓、月野は裏山を登っていた。

正直言うとかなり迷ったのだが、昨日の謎を解き明かしたい気持ちもあった。

まだ充分に日も高い午後四時、山に入る。時計を見ると、まだ動いていた。

ザクツザクツと地面を踏み締め、登りながら、おれと碓は意図半分、昨日の疲れと筋肉痛半分の理由で、月野から少し遅れをとって歩いた。

「なあ碓」

「なんだい？」

「昼の続きだけど」

意図半分とは、モチロン、屋上での続きを話すためである。

「ヒル夫妻は時間が、余分に、掛かってたんだろ？」

「そうだよ」

「でもおれたちは時間が、足りない」んだよ。どう計算してもな」

「うん……」

「絶対おかしい」

「そうだね」

「余分なら思い違いつてもあるだろうけどさ」

はあはあ

「確かに。僕も理屈じや計り知れないものを感じるよ」

ふうふう

「むむむ」

ひいひいひい

「ぬぬぬ」

ぜえぜえぜえ

結局、再会された会話は五分と持たなかった。

すぐに山道の苦しさに、思考が停止してしまつたからだ。

さすがに、二日連続は、キツイ。

月野は慣れているのだろう。平気な素振りでひたすら登り続けていく。

どんどんおれたちとの距離は開いていき、やがて視界から消えた。

ぜえはあひい

ぜえはあひい

荒い息と心臓の鼓動だけを聴きながら、足を進めるといふ単純作業を、おれたちはひたすら繰り返して続けた。

結論から言つて、この日は何も起こらなかつた。

時計はずっと時を刻み続けていたし、レティキュライらしき星も見えなかつた。

山頂に着いた時、日の暮れ始めた五時過ぎの空には、一番星が輝いていた。

月野は右手を挙げ、人差し指を立て「受信します」と呟き、慣れた足取りで跳ねるように踊った。

時折スカートからのぞく白い腿が、否応なしに昨夜見た夢を思い起こす。

下半身がむず痒いような、居心地の悪さを覚えた。

一通り終わると、今度はおれたちも交えてのお祈り。

空には何の変化もなく、それでも降るような星がキラめいていて思わず「ホウ」と溜め息が出た。

それも終わる頃、時計は六時を指していた。

三人で下山、入山口で月野と別れ、おれと碓は昨日と同じく自転車を漕ぐ。

時計は六時四〇分を指していた。

「なにも、なかったな」

と、おれは拍子抜けした声で言った。

「だね」

碓はそう言っただけだった。

昨日は、どうかしていたのかもしれない。

そんな気がした。

おれたちは特に会話もしないまま、別れの曲がり角で、それぞれの家路に着いた。

4

そして、あつという間に三週間が過ぎた。

その間、最初の夜みたいな異常は一切起きず、ただ前述のいさか退屈な行事が繰り返されるだけだった。

それでも、おれも碓もサボらず山に登り続けた。

土日も休まずである。

何故だろうか？

どうせ毎日ヒマだったってこともある。しかしそれだけではないだろう。

楽しかったからだ。多分。

三人で過ごす時間は単調そうで、全く飽きなかった。

月野は相変わらず訳のわからないことばかり言う。

この間なんてケツサクだった。

昼休み、月野がいつも同じ無表記のロールパンとオレンジジュースを持ってきているので、おれがふと気になって「月野は

それしか食べないの？」と聞くと

「これはレティキュライから贈られてきた特別な物なの。彼ら

が円盤で運んで来てくれたのよ」

そう言ってロールパンを示し

「これはパンに見えるけどレティキュライではパンの実と云っ

て、このまま木に生っているの」

次にオレンジジュースを示し

「これはオレンジジュースみたいだけどレイキュライではただの水よ。蛇口を捻るとどこの水道からもこれが出るわ」

と言った。

「あ、ああ、そうなんだ」

おれはそう言つて碇と顔を見合わせ、声を押し殺して笑つた。

そんな彼女だが、日常会話は成立するし、軽い雑談なら、おれと碇に混ざつて参加していた。

まあ、ツマらなそうではあつたが。

毎日裏山を登る内、山道にも段々と慣れてきた。

すると余裕が出たのか、色付き始めた木の葉の美しさや、土や木々の入り混じつた山の空気が心地よく感じられた。

山頂に着き、やがて日が暮れると、空の月や星はモチロン、ふと視線を下げると、住宅街の無数の明りが星とは別の、人工的な温かみのある美しさを放っていた。

今となつてはこうして裏山の頂上で手を合わせ、夜気に震えながら、街と空に灯つた明りをボンヤリ眺めている時間が、一日の内が一番落ち着く瞬間となつていた。

それでも十一月ともなるとさすがに寒い。

おれたちは手袋やニット帽で防寒し、ポットに熱いお茶やコーヒーを入れてくることを忘れなかつた。

しかし月野だけは、白いダウンジャケット以外は何も、防寒具らしきものを身に着けなかつた。

まあ、なんつうか、恥ずい言い方をすると、これがおれたちなりの青春だつたんだと思う。

ちよつと頭のおかしな少女と、ムツツリな秀才と、何の取り柄もない卑屈なおれの。

うん。そうだ。

あの毎日が紛れもなく、キラキラした青春だつた。

学校ではというと、おれたちに関する様々な噂が飛び交つているようだった。

まあ無理もない。

意外な取り合わせの三人が、昼休みや放課後、何やら行動を共にしているらしいとなれば、ウワサとはイロイロな尾ひれが着いて伝播していくものだ。

『3Pしてららしいぜ』

なんていう失礼千万なものもあれば

『裏山で宇宙人と交信しているらしい』

なんていう、意外にも的を得たものもあつて、ギクリとした。

まあ、おれを含め、三人とも特に気にはせず、堂々としていたおかげもあつてか、ウワサも徐々に沈静化していった。

何しろ、みんな移ろい易い年頃なのだ。

そんなある日、おれと碓がいつものように昼休みに屋上へ行くど、一足先に来ていた月野が神妙な顔つきでおれたちをじっと見た。

なんとなくの勘で、何かあるとおれは思った。

「どうした？」

と、尋ねたおれに、月野は

「今日は、特別な日になるわ。きつと」

と答えた。

「どういう意味だい？」

碓も尋ねる。

「昨日の夜、家に帰ってからね、レティキュライから緊急の連絡があったの。」

それは今までで一番強い宇宙電波でね、それによると一週間くらい前に、火星からオレンジが地球に飛来していたらしいのよ。もう、あの人たちももう少し早く教えて欲しいもんだわ！こっちだって心の準備があるのに。ねえ？」

同意を求められても困るのだが、おれと碓は何となく頷いた。

「まあ、代わりにイイモノをくれたんだけどね」

そう言うと月野はイタズラっぽく笑って後ろ手に隠した黒い

ビニール袋を差し出した。

「二人とも取って。オレンジと戦うための武器よ」

一体なんだろうか？

恐る恐るビニール袋に手を入れる。

すると棒きれのような感触。持ってみると、ズッシリと重い。

袋から引き抜くと、おれの手には木製の柄に黒光りする鉄が着いた、いわゆるハンマーが握られていた。

柄は約二十五 cm 弱、鉄は十 cm 未満で片方が平ら、もう片方は釘抜きになっていて、湾曲した先端が猛禽類の爪を思わせる。

碓が手にしたのも、同じ型のハンマーだった。

おれたちは顔を見合わせた。

「オレンジは、私たちの存在を知ってしまったの。レティキュライからの命で地球を守る戦士がいることをね。今夜あたり、攻撃を仕掛けてくるはずよ。とりあえず、武器は渡しておくから、いつものように放課後、裏山で会いましょう」

月野はそう言うのと食事も摂らずに駆けて行ってしまった。

おれたちは手に「武器」を持ったまま、しばらく茫然と立ち尽くしていた。

空は気が滅入るほど青く晴れ、今夜も星がよく見えそうだった。

## 5

「なあ、どう思う？」

ザクザクと、慣れた足取りで山道を歩きながら、おれは碓に聞いた。

「何が？」

「今夜、何か起きるのかな？」

重ねて問うと、碓は顎に手をやり、いつもの考える仕草をした。

「……武器を、渡されたよね」

「ああ」

おれたちのバッグの中には、それぞれにあのハンマーが入れている。

「何かと、戦うのかもしれない」

「オレンジと、だろ？」

おれは冗談めかして言ったが、碓は笑わなかった。

火星からやって来る侵略者・オレンジについては、月野から何度も説明を受けていた。

それによるとオレンジはリカちゃん人形ぐらいの大きさしかない、小型の宇宙人だという。

ヤツらはその名の通り、全身を発光するオレンジ色に包まれており、丸い頭部が身体の三分の一を占める。

釣り上がった大きな目に、鼻は穴が二つ空いているだけ。耳も同様。口はちようど人間がキスをする時みたく、窄められて

いるそうさ。

そんな弱そうなヤツ、脅威じゃないと思うだろう？

ところがどっこい。オレンジは特殊な能力を持っていた。

ヤツらの身体はオモチヤのスライムみたいに伸縮自在で、人や動物の口や鼻からズルズルと体内に入り込むことが出来るのさ。

体内に入られたらもうオワリ！

脳みそを乗っ取られて操り人形にされちまう。

ヤツらは小型カプセルに入って地球に飛来する。

まず狙われるのは脳の回路が複雑じゃない小動物だとも月野は言っていた。

後で碓に意見を聴くと

「ぼくもあれから調べたんだけど、オレンジって宇宙人については身体がオレンジ色で頭でつかちつてところ以外は記録にあるのと別物だね。どうやらグレイと混同しているみたいだよ。

身体の乗っ取りは映画の影響かな。「ボディ・スナッチャー」とか「遊星からの物体X」とかね。」

そうさ。その時おれたちは、やっぱり全ては気のせいだった。と半ば思い始めていたんだ。

そんなことを思い返していると、あつという間に山頂に着いた。

この頃になるとおれたちは登り切るのに三〇分と掛からなくなっていた。

しかしそれ以上に月野は早く、まだ一番星もない空に向かって、祈りを捧げていた。

時間は午後四時〇〇分。

なんだって？

おれは碓を見た。すると腕時計を見て同じ表情を浮かべる。驚愕の表情を。

また、時計はおれたちが山に入ったのと同じ時刻で、止まっていた。

「あ！ あれを見ろ！」

碓が叫んで指差すその先には、つい今さっきまで沈み始めた陽の光一色だった空に、その光を打ち消すように輝く、四つの星があった。

「レティキュライ座……」

おれが眩くと月野がぐるりとこちらを向いた。

微かに、笑っている。

しかし今日は、どことなく表情が硬い。

「さあ、二人とも、お祈りをして。ヤツらが来る前に」

おれたちは祈った。

何かが起きる。

それはもう予感なんてものじゃなく、確信に近かった。

その「何か」が、せめて手に負えるものであるように、おれたちはただ祈った。

どれくらい経ったか、目を開けると辺りは深いコバルトに支配されていた。

空には月と、あの星。

街の灯もチラチラとハッキリ見える。

妙に明るい夜だ。

「おでましよ」

月野が言って、おれたちは即座にバッグの中から武器と、ハンドライトを取り出す。

唯一の獲物はズッシリと重いが、命を守るには軽すぎる気がした。

ガサリ ガサガサ

おれたちが登ってきた辺りの茂みが音を立てた。

すぐさま二つの光の輪が、茂みに向けられる。

草木が少しばかり揺れ、何かの気配がじわり、と周囲に沁み

る。ササッと三つの影が、山頂の平地へと躍り出た。

にゃーお

それは一声鳴いた。

「猫……？」

おれは思わず呟いた。

三つの影の正体はミケ、ブチ、トラの模様のついた三匹の猫だった。

三角の耳に、ガラス玉みたいな目、毛並みはノラであることを示すかのように、少しゴワワしていた。

「猫じゃないわ」

月野が鋭い声を出す。見るとその額には玉のような汗が浮かんでいた。

『まず狙われるのは、脳の構造が複雑じゃない小動物』

月野が言っていた言葉が、脳裏を掠めた。

おれたちの間には、ピンと張り詰めた緊張を、更にギリギリと引き絞ったような空気が満ちていた。

胃が縮んでイタイ。

息が浅く、回数を増す。

夜気が肺に直接触れるようで、少し苦しい。

ただの猫じゃないか……そうも思う。

しかし気を緩めれば死んでしまいそうな気がして、もはや視

線すら、剥がせない。

と、次の瞬間、おれたちは我が目を疑った。

三匹の猫は、おれたちの3mほど手前に歩み寄ると、すつくと二本の後ろ脚で立ち上がったのだ。

そして丸く光を帯びた目を細め、口角を吊りあげて「ニイ」と笑った。

信じられるか？ 猫が笑ったんだ。

よく犬が舌を出した顔が笑っているように見えるとかいっけど、そんなレベルじゃない。

まるで人間みたいに、いやらしくニタニタと笑っている。

「何なんだよ。コイツら……」

身体が震え、肌が粟立つ。

ハンマーとライトを持つ手が汗で滑る。

しかし、すぐにこんなものは序の口だと知る。

「ナンダ、れていきゅらいノせんしガドンナものカトおもッテ  
キテミタラ、ただノガキジャナイカ……」

夢じゃなければ、空耳でなければ、目の前の猫が、正しくは真ん中のブチ猫が、口を動かし喋っている。

高音のそれは黒板に爪を立てる音同様、生理的に嫌悪される類のものだった。

「スグニかたヲツケタイ。いまハじかんガおシイカラナ」

そう言ったのは右に控えるミケ猫。

「オレ、〴〵いたい、ダケデよカッタンジャンイノカ？」

続いて左のトラ猫が答える。三匹とも全く同じ声音だ。

とんでもない。

これはとんでもないことになった。

「月野……」

おれは振り絞るように声を出す。

案の定、渴いた喉からは掠れ声しか出なかった。

「二人とも、レテイキュライの神を信じて、あなたたちには武器があります」

「武器つたつて……」

碓も、おれ同様の掠れ声で言う。

「おまえタチ、とくニおすにひきハひどクおびエテイルナ」

「たたかうまえカラガツカリサセテクレルゼ」

「マアイイ、サツサトケリヲツケヨウ」

どの猫がどの言葉を言ったのか、把握する前に次の異変が起きた。

猫の顔に、威嚇する時のような皺が刻まれ、鋭い牙がむき出しになる。

「フ——」という音というか声が三匹から漏れる。

すると、猫の前足から、ギラリと光るモノがするすると伸び

始めた。

体長五〇cm弱、丁度ティッシュの箱を二つほど並べた程度の大きさ。

その手から伸びた「爪」は、今や身体の半分以上の長さになっていた。

呆気にとられるおれたちに猫は言う

「おどろイタカ？ コノせいぶつノこうぞうハあらかたりかい

シタ」

「月野……」

「イクヅ」

「助けて……」

「われラノちきゅうしんりやくノいしずえトナレ」

次の瞬間、三匹は光の輪から消えた。

慌てたおれたちは、ライトを滅茶苦茶に向ける。

束の間、山頂に光の輪が乱舞した。

おれのライトが闇の中に光るものを認めた時、左腕に鋭い痛みが走った。

「痛っ」

思わず左手に持ったライトを手放してしまふ。

ライトはカラカラと転がって、闇の中の一つの光点となる。

同時に、左手に生温かいものが伝う。

血だ。





切られたんだ。

あの爪で。

脳がそう認識すると、おれは平静を保てなくなった。

「うわあああああつ！！！」

叫び、闇雲にハンマーを振り回す。

「山形！ 落ち着け！」

碇の声。

ライトの光がおれに向けられる。

眩しい。

直後、悲鳴。

碇のライトがぐるりと軌道を描いて地面に転がる。

「くそつやられた！」

しゃーしゃー

ヤツらの鋭い呼吸。

はあはあ

おれたちの荒い呼吸。

ぶんぶん

ハンマーの風切り音。

びゅんびゅん

ヤツらの爪の音。

いくら月や星が照らすからといっても、ライトがなければ視

界は開けない。

しかしライトを拾う余裕はおれたちにはなかった。

いつ、ヤツらが鋭い爪で切り裂いてくるかわからない。

ただ唯一の防御策として、碓と背中をくっつけて、必死にハンマーを振るった。

小回りが利くこの武器が常に振り回されていては、ヤツらも一気に襲っては来られないだろうと思っただ。

しかしいつまでも持つ策ではない。

事実、少しずつ、ヤツらの爪はおれたちを切り裂いていた。脹脛はふばたであつたり、上腕であつたり、或いは脇腹、または頬。

思い切つての一撃ではないため、掠り傷のようなものではあるが、確実に効いている。

どうしたらいい？

このままじゃ切り刻まれる。

月野……。そうだ。月野はどこだ？

そう思つた刹那、頬に暖かいものが触れた。

それが人間の手、きめ細やかな女性の手であると理解した時、耳元で声がした。

「大丈夫。あなたたちにはレレイキュライの力が既に備わっているはず。もう一度、空を御覧なさい」

月野の声。耳に掛かる熱い吐息が、一瞬、研ぎ澄まされた神経と昂ぶつた精神とを鈍磨させた。

しやあああああ

今までより一段と鋭いヤツらの呼気。

それには勝機を確信した者の高揚が見て取れた。

ヤバイ、とおれが思つた時にはもう遅かつた。

まず右の肩口に熱を感じ、そのまま胸元まで一気に熱くなつた。

その直後に生温かい噴水が顔を濡らす。

口にまで飛び込んだ飛沫は、ヌメリと鉄の味がした。

ドウと倒れたおれの身体が、同時に倒れ崩れる碓の身体にぶつかる。

「碓……」

死ぬのか、おれら。

二人の視線は、自然と空へと向かつた。

そこには月も、降るような星も見当たらなかつた。

代わりに、あの四つの魔星が、ギラギラ燃えたぎるように光っている。

その光は深い緑色で、それを認めたおれは、おれは、おれは、おれは。

「あっけナイナア」

「ココマデよわイトハ」

「あとハめすヲヤルダケダ」

三匹の猫、いや、もはや猫ではないだろう。

三体の二足歩行の不可知生命体は、血の滴る爪、背丈の半分  
以上もある凶器を。ヘロリとやりながら、月野ににじり寄る。

彼女はそれでも微動だにしない。

おれは、そんな光景をボンヤリと「見ていた」。

切り裂かれ、倒れたはずなのに。

確かに見ていた。

ぐっ、と足を踏ん張って月野は仁王立ち。

時折吹く冬の色を濃く帯びた風が、長髪とスカートを僅かに  
はためかせる。

「にゼナイノカ？」

「きょうふデすくンデうごケナイノカ」

「ドッチデモイイ、きりきぎンデヤル」

三体は尚も月野へ迫る。

充分に飛びかかれる距離なのにそれをしないのは、獲物を怯  
えさせたいというサディスティックな心情の表れだろうか……。

なんてことはどうでもいい！

逃げる！ 月野！

何故だか声が出ないおれは懸命に念じた。

しかし月野はおれの念に應えるどころか、ニヤリと口角をあ  
げて笑って見せたのだ。

「愚かな侵略者共め。それで勝ったつもりなの？」

腹の底から出しているような声、やけに大仰な言い回しでそ  
う言うと、月野はスウと息を吸い込んだ。そして、朗々と歌い  
だした。

それは、この地球上のどこでも、聞いたことのない言葉だ  
った。

オペラのような、童謡のような雰囲気、それでいて抑揚のあ  
まりない、淡々とした歌。

夜気に染み込むように吐き出される歌声は、小柄な彼女から  
出ているのが不思議なほど、堂々としたアルト・ヴォイスだ。

三体の怪物は、この歌に目を大きく見開いた。

感動しているのではない。

しかし驚いてはいるだろう。

この窮地において歌いだした獲物を見て、理解に苦しむ、と  
いった風だった。

その時、この三体の背後でナニカが動いた。

三体は互いに目で「そろそろ殺そう」という合図をする。

ミケ、ブチ、トラの順に身を屈め、飛び込む予備動作を行う。

毛が逆立ち、足の筋肉が硬直し、次の瞬間。

跳躍、は阻止された。

夜の山頂に、聞いたこともない悲鳴が響く。

必死の形相でのたうちまわっているのは、丁度挟まれるようにして真ん中にいたブチだった。

その頭部はひしゃげ、裂けた肉の隙間から鮮血が撒き散らさ  
れている。

何が起きたのか。

両隣の二体も驚いて身を翻す。

ブチがやられた辺りの暗闇から距離を置くように跳ね、ガラ  
ス玉みたいな目を剥いて様子を探る。

「ナンダ？ アレハ」

月明りに照らされて、ゆっくりとその輪郭を露わにしていく  
のは、二つの人影だった。

ゆらりゆらりと幽鬼の如く、覚束ない足取りで地面を踏む。

「ばかナッツ」

「ころシタハズダツ」

二体の怪物が思わず声を上げる。

影は利き手にハンマーを持っていた。片方は平らで、もう片

方は釘抜きになっていて、湾曲したそれは猛禽類の爪を思わせ  
る。

しかもその武器は今や血にまみれている。

凍りつく二体の前で、絶えず苦しそうな声をあげているブチ  
に、影は容赦なくハンマーを振り上げ、振り下ろした。

グチャ、グチャ、と鈍い音が何度かして、ブチの声は絶えた。

二つの影——山形圭吾と碓貞美は、無感動な表情で二体を見  
る。

その目は、空の魔星と同じく緑色に輝いていた。

「つておいおい！」

「なんだよありゃ。」

「おれと碓じゃねえか！」

「どうなってんだよ！」

あの、全身の至るところが鮮血に染まって虚ろな目をしたゾ  
ンビみたいなヤロウは、紛れもなくおれ山形圭吾と、碓貞美だ  
った。

闇に紛れて目立ちほしないが、人前なら救急車か警察が飛ん  
でくるだろう。

おれは見るからに右肩から左わき腹に掛けて袈裟に斬られ、  
上半身の血の大半はそこから流れ出たものと思われた。

碓は左の下腹。範囲こそ狭いがよく見ると背中にも同様の血  
痕があり、突き立てられた爪が貫通したことを如実に物語って



そしてハンマーが、軽いスナップを利かせて振り抜かれる。

グシャン

と、肉の潰れる音。

高音の、超音波みたいな絶叫が響く。

ボトリと地に落ちたミケの顔は、小さな眉間が血を噴いてめり込み、両目は誇張ではなく眼窩からとび出していた。

高速のカウンターで加えられた一撃は、そのまま怪物の生命をも断ち切っていた。

人間じゃねえな、おれ。

それがその時の正直な感想だった。

トラは、この現状を見て初めて、身の危険をハッキリと悟ったようだった。

「クソウツ、いちじたいきやくダツッ」

正方形をエンドレスに跳んでいたトラは、そのまま木立の間隙に身を溶かそうと方向を変える。

しかし。

その方向には、いつの間にか碓がハンマーを振りかぶって待っていた。

「ギャアアアアアッ」

死の恐怖を孕んだその悲鳴は、そのまま断末魔へと変化する。

ザクツ

碓は釘抜きを下にしてハンマーを振り下ろした。

湾曲して鋭く尖った釘抜きは、トラの頭頂部に突き刺さり、その勢いのまま、地面に埋まれとばかりに叩きつける。

こうして二体の怪物は完全に動かなくなった。

それと時を同じくして、月野の歌もフィナーレを迎える。

伸びやかなアルトが絶頂まで上り詰め、プツッと途切れると、おれと碓も糸の切れた人形のように、その場にパタリと倒れて動かなくなつた。

全てを見ていた少女は、空の魔星を見上げて叫ぶ。

「どうですか、やりましたよ……見てましたよね？ オレンジ二体、抹殺いたしました」

その声に応えるように、光を受けたエメラルドの如く、レイキュライ座は燃え輝く。

月野は笑った。その勝利の哄笑を聴いていたのは、レイキュライと、山の静寂、そして意識が朦朧とし始めたおれだけだった。

## 7

目が覚めると、山の冷たい土の感触が、身体に伝わってきた。

何が、どうなったんだっけ？

三人で山に登って、そしたら、猫が三匹できてきて。

そいつら喋って、爪が伸びて……。

思い出した。

おれと碓は、斬られたんだ。

んでもって、その後のアレは、夢……か？

「うわあっ」

急に視界を光が横切り、驚いて身体を起こすと、すぐ隣で、

碓が茫然とした様子で胡坐をかいていた。

手でハンド・ライトがボウツと光っている。

「碓っ。お前、大丈夫なのかっ？」

「……山形、起きたか。アレ、見て来いよ」

そう言っただけで碓は持っていたライトを手渡す。

「そんなことより怪我は」と言いかけて、そう言えば、身体の

どこも痛くないことに思い至る。

「見て来いよ」

顎をしゃくって尚も数メートル先を示す碓。

不審に思いながら恐る恐る、近づいてみる。

「なんだ、これは？」

一瞬で肌が栗立った。

そこには、あの三体の怪物の無残な死骸があった。

頭部は原形を留めぬほどにグチャグチャにされている。身体

でかろうじて元は猫だったと分かった。

死骸はブチ、ミケ、トラの順に、キレイに並べられている。

「やっぱり、夢じゃなかったんだ……でも、ここ」

「そこじゃない、その上だよ！」

「ここまでやったか？ おれ」と言い掛けたところに碓に大声

を出され、ビクリとなりながらもライトを上にはずらす、と。

「うわあああっ!!」

おれは思わず尻もちをついた。

そのままもう一度、気を失いそうになる。

いや、ひと思いに失神すればよかったのだ。

そこにあつたのは、三体の不気味な生き物の死骸だった。

大きさはトカゲを二周りほど大きくしたくらい。全身がオレ

ンジ色がかっていて、何よりおれを震撼させたのは、そいつが

「人間の形をしている」ってことだ。

頭が異様に大きく、吊り上がった目。二つの点のような鼻。

耳も同じく。口は、窄めたように尖がっている。

「ああ、起きたのね！」

「わあっ」

月野だったが、思わず悲鳴を上げてしまった。

急に声を掛けられたからじゃない、月野の顔や手、服の至る

所に血が付着していたからである。

「どうしたんだそれ！」

「ああこれ？ ちょっと『取り出す』のに手間取っちゃってね」

そう言っただけで彼女から、おれはコトのあらましを聴いた。

月野が言うにおれたちの『変貌』はレティキュライ戦士とし

ての覚醒の証だという。

身体の傷が消えているのはレティキュライから来た円盤が、ご丁寧にも治療していつてくれたのだそうだ。

碓にも訊くと彼もまた、意識だけ乖離した状態であの戦いを「見ていた」のだという。

月野はおれたちが治療を受けている間に三匹の猫の頭をハンマーの釘抜きでこじ開けて、中に入っていたオレンジの死骸を引き摺り出したのだ。

おれたちとはというと、全てを聴いても尚、現実感を損なわれたままだった。

そりやそうだ。おれたちが見ていた感覚はまるで映画かゲームみたいに、絵空事染みていたのだから。

ただ、これで月野の言うことを真に受けないワケにはいかなくなかった。

レティキュライからの指令も、火星からの侵略者も、全て実在する。

おれたちは猫とオレンジの死骸を月野が持参していた園芸用のスコップで掘った穴に埋めて、裏山を後にした。

別れ際、月野はおれたちに「ゆっくり休んでね」と言った。

その響きは「次もよろしくね」と暗に伝えており、おれは心がズシリと重くなるのを感じた。

碓とは終始、無言で別れた。

帰宅後、身体は無傷でも、ズタズタになった衣服は言い訳が利かず「自転車で転んだ」と無理な言い訳を挑んだが、母は「あらあら。かさばるから別のゴミ袋に入れといてね」と言うだけだった。

ともあれ、言及されずに済んだのは有難かった。

風呂、夕食、そして就寝。

身体は疲れ切っているはずなのに、ベッドに横になっても、おれはなかなか眠れなかった。

目が冴えて、というよりも、意識を失うことでおれではないナニカが溢れ出て来そうで怖かったのだ。

結局、明け方まで、おれは悶々とベッドで過ごすことになった。

やがてオレンジ色の朝日が東の空に登る。

カーテンの隙間から零れた朝日を受けたおれの身体がやけに震えるのは、どうやら寒さのせいだけではなさそうだった。

(続く)